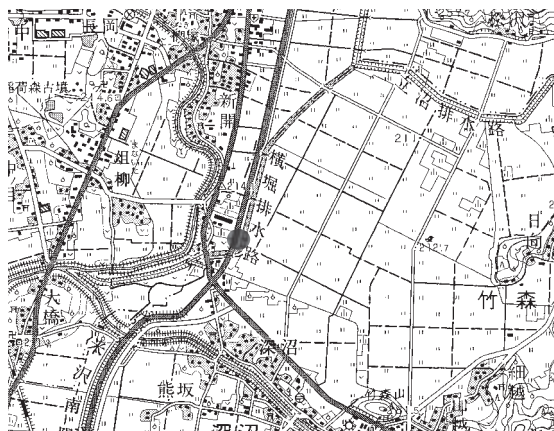


おんだし 押出遺跡（第5次）

遺跡番号 381-313
調査回数 第5次
所在地 山形県東置賜郡高畠町大字深沼字押出
北緯・東経 38度1分47秒・140度10分16秒
調査委託者 山形県教育委員会
起因事業 農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所 国営かんがい排水事業（米沢平野二期）
調査面積 525 m²
受託期間 平成24年6月1日～平成25年3月31日
現地調査 平成24年10月15日～12月20日
調査担当者 水戸部秀樹（現場責任者）・大場正善・伊藤大介・岩崎恒平
調査協力 高畠町教育委員会 農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所
遺跡種別 集落跡
時代 縄文時代
遺構 炭化物集中地点・石器集中地点・窪地・打ち込み柱・柱穴
遺物 縄文土器・石器・石製品・木製品・漆器・彩漆土器・クッキー状炭化物・種子・骨（文化財認定箱数：172箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

押出遺跡の発見は、1971年に沼尻堀の掘削後の排土から土器や石器が拾い上げられたことが契機となった。遺跡は^{おおやち}大谷地と呼ばれる湿地帯に位置しており、国道13号建設工事を起因として、1985年から3カ年におよぶ発掘調査が実施され、大きな成果が得られた。地下2m下に特殊な構造をもつ住居群、通常の遺跡では残りにくい有機質遺物、^{さいしつ}彩漆土器や^{もくたい}木胎漆器などを始めとする貴重な遺構・遺物の数々が発見され、その重要性は

約1,100点の出土品が国指定重要文化財になったことからもつかがえる。国営かんがい排水事業の一環として計画された沼尻堀の改修工事にもない、昨年度実施した第4次調査においても住居4棟、窪地のほか、縄文土器、石器、木製品などが多数発見された。今年度の第5次調査はこれに継続するものである。

遺構と遺物

これまでに、第1～3次調査では住居跡39棟、集石遺構1基が発見され（図1・写真4）、昨年度の第4次調査でも堀の西岸部から盛土をもつ住居跡4棟と多数の遺物が検出された（図1・写真1・2）。住居1・2は大きさは違うが構造は同じである。盛土の下に転ばし^{ねだ}根太とよばれる丸太材を縦横に敷き詰めており、これは柔らかな地盤に住居を建てるための工夫と考えられる（写真1・2）。盛土には砂や粘土が交互に積み重ねられ（写真2）盛土の周囲には壁柱と考えられる多数の柱が打ち込まれていた（写真1）。このことから、住居1・2は、15号住居跡（写真3）と同様、敷き詰められた^{ねだ}転ばし根太の周囲を、打ち込み柱の柱列が楕円形に巡る構造であったと考えられる。この構造を持つ住居は図2・写真4のように復元されている。

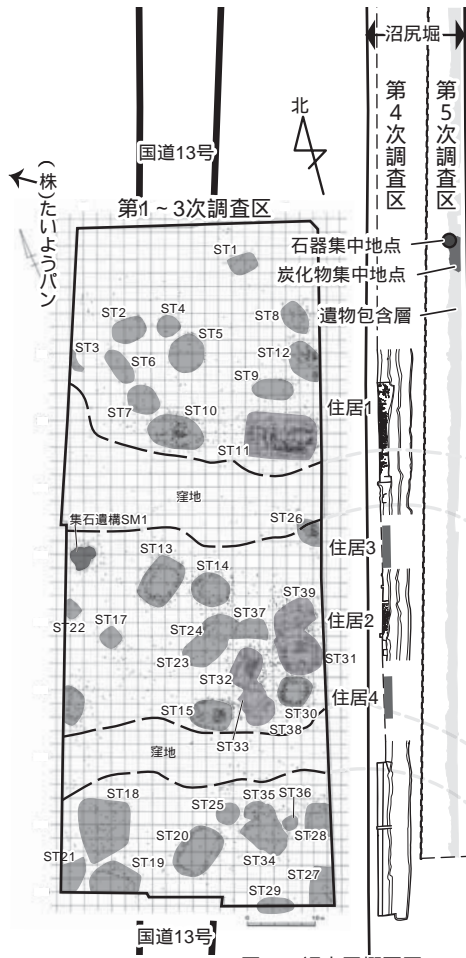


図1 調査区概要図 (1/1,000)



写真1 住居1 (第4次調査) 検出状況 (北東から)



写真2 住居1 (第4次調査) の盛土断面 (南西から)

今回の第5次調査では、調査区となった沼尻堀東側の堀底は遺跡の下まで掘削されており、ほぼ全て失われていたが、東岸部の斜面に位置する幅約1mの部分から、炭化物集中地点(写真8)、石器集中地点(写真9)、窪地が検出された(図1)。炭化物集中地点の範囲は南北約5mであり、その北側に石器集中地点が含まれる。住居跡は検出されなかった。

遺跡全体が厚さ約30~80cmの遺物包含層(写真5)に覆われており、その中から遺物が出土した(写真6・

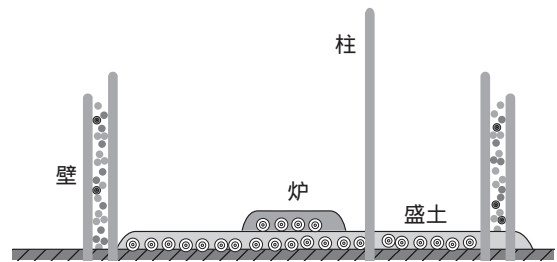


図2 住居下部構造模式図(文献1より)



写真3 15号住居跡(第3次調査)(東から:文献1より)



写真4 20号住居跡(第2次調査)復元模型(文献1より)



写真5 遺物包含層検出状況(南西から)



写真6 遺物包含層出土の土器(西から)



写真7 遺物包含層出土の彩漆土器(西から)

7) 特に、第1～4次調査でも検出されている窪地の延長部から多く出土しており、この窪地は廃棄スペースとして利用されていた可能性がある。

遺物は縄文土器、石器、石製品、木製品などが出土した。土器は東北地方南部の土器型式である、粘土紐を貼り付けた曲線的な文様などが特徴の大木4式期のものと、爪型の工具で線を引いたり連続した点を打つ文様が特徴の新潟県の刈羽式に類するものが出土しており、人やモノの交流がうかがえる。また、彩漆土器は赤漆が塗られた

小型の鉢が1点出土した(写真7)。

石器・石製品は、石鏃、押出型ポイント、石匙、石錘、磨製石斧、石皿、玦状耳飾りなどが出土した。

押出型ポイント(写真10)は本遺跡で特徴的な石器であり、湿地に群生するヨシの刈り取りなどに使用されたと考えられる。玦状耳飾り(写真11)は軟玉製で、大変貴重な装飾品である。磨製石斧(写真10・11)は大型・小型のものが出土しており、それぞれ、木の伐採、細部加工などに使い分けがなされたと考えられる。

木製品は、皿状木製品やへら状木製品(写真12)が出土した。へら状木製品には石器による丁寧な加工痕が見られた。先端は矢印状に成形され、末端には持ち手と考えられる部位が作り出されていた。これらの他には、食料となったクルミの殻が大量に見つかった。

また、発掘調査時に炭化物集中地点から採取した炭を調査後に選別したところ、クッキー状炭化物(写真13)が発見された。クッキー状炭化物は堅果類を加工・調理した可能性がある。渦巻文を施した植物質炭化物で、1986年の第2次調査でも出土している。



写真8 炭化物集中地点(南から)



写真9 石器集中地点(西から)



写真10 左から大型石鏃、押出型ポイント(2点)、
大型磨製石斧



写真11 左から塊状耳飾り、小型磨製石斧



写真12 ヘラ状木製品出土状況(西から)



写真13 クッキー状炭化物

まとめ

今回の発掘調査では、これまでで最も東側の調査区が設定された。住居跡は見つからず、遺物の廃棄スペースが広がっていることから、本調査区は集落の居住域から外れた場所だと考えられる。

これまでに見つかった遺構や出土品から、当時の押出遺跡の様子は図3のように想像されている。今後、当時の人々の生活をより明らかにしていくためには、湿地に適応した住居や石器などの出土品を手がかりとし、人々が積極的に湿地へと進出していった可能性を含め、当時の気候や湿地で得られる様々な資源などを広く検討していく必要がある。



図3 ある日の押出ムラ(文献1より)

引用文献 文献1 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
2007 『押出遺跡』